

## 第2章 銃後

銃後の暮らし④【北海道・札幌】

# 一番大変だったのは食べ物が無いこと

あぜはらただお  
畔原忠雄さんのお話から

○大東亜戦争 昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本政府はアメリカ・イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった対中国戦争を含めて、「大東亜戦争」（大東亜とは東アジア・東南アジアのこと）と呼んだ。これに対し、アメリカ側では対日戦争を太平洋戦争と呼び、戦後の日本でもこの呼び名が定着した。

私は昭和五年（一九三〇年）の生まれで、「大東亜戦争（太平洋戦争）」が始まった年は、小学校五年生の二期の終わりころでした。朝、学校に行き、先生から戦争が始まったというお話を聞きました。そのころは子どもでしたので、実感がありませんでしたが、時間がたつうちに、戦争とはこんなにも恐ろしくむごいものかと思うようになりました。

戦争が始まった日は、雪が五十センチくらいあったと思います。今から六十七年前ですからかなり昔です。当時は雪がかなり多くて、寒さも非常に厳しかった感じがいたします。

今とは違って着るものもないし、履いているものも違います。きものだって、今では想像もつかないと思いますけれども、長靴なんかも自由に買うことができなかったのです。穴のあいたところを修繕しながらはいていました。友だちの中には稲わらで作ったわらぐつというものははいていた人もいました。道が凍っているうちは良いのですけれども、少し暖かくなるときまずと雪が溶けて、わらぐつが濡れて非常に冷たくなりました。住宅事情も違います。とにかく寒さというものを当時は非常に強く感じておりました。

昭和十六年に戦争が始まり、日本軍は十二月八日に真珠湾攻撃とマレー半島に上陸して、その翌年二月十五日、シンガポールを陥落させました。シンガポールはゴムが非常にたくさん採れるところでしたから、戦勝記念に長靴の配給がありました。全員にあたったわけではありませんが、私はいただいた記憶があります。先ほどお話ししましたように、長靴は自由に買えるものではありませんでしたので、本当にうれしかったです。

○ヒマ トウゴマともいう。熱帯東アフリカ原産の植物。茎は太く一〜三メートルの高さになる。日本には九世紀頃渡来。四月中旬以降に種ができるが、その種に含まれる油をしぼり、ヒマシ油をつくる。ヒマシ油は下剤、化粧品原料や工業用にされる。

当時、本当に困ったのは食料と物資の不足で、切符で配給されるようになっていました。中でも一番大変だったのは、やはり食べ物が無くなってしまったことだと思っています。食料になるものは何でも食べました。米ぬかというものも食べました。今、私たちが食べている白いお米は玄米を精米したのですが、そのお米の上にかぶっている皮を「ぬか」と言います。それを食べた記憶があります。私の家は辛い水田を作っていましたから、お米を食べることはできたのですが、私の母がどのようなものを教えようという気持ちで作ってくれたのだと思います。さらに、とてもゴワゴワして食べづらかったです。さらにはでんぶんのかすというものも食べました。でんぶんを作るには、ジャガイモを機械ですり、でんぶんと「かす」に分けるのです。水をかけながら、網ででんぶんと「かす」とに分けていくのですけれども、網の上の方に残った「かす」を食料にしました。とにかく、食べ物がないことくらいつらいものはありません。何でも食料に出来るものならばと、みなが食べることに工夫をして生活をしていました。

それから例えば衣料に使える亜麻もつくりました。亜麻は何に使うかというと、茎に繊維があるので、その繊維を使ってテントや衣料などを作ったのです。大麻も作りました。茎にある繊維を使ってロープなど



アツ島玉碎将兵の遺骨を迎える札幌市民

イメージ図

○アッツ島 アリュー  
シャン列島の島。昭和  
十七年（一九四二年）、  
ミッドウェー作戦と並行  
して日本軍が占領。しか  
し、昭和十八年（一九四三  
年）日本軍守備隊に対し  
て、アメリカ軍の攻撃が  
開始され、最後の残存兵  
三百名が全滅した。  
○玉砕 アッツ島の守備  
部隊の全滅を、大本営（戦  
争当時の作戦指導機関）  
は、「玉のように美しく  
くだけ散ること」を表す  
「玉砕」ということばで  
発表した。これ以降、太  
平洋の島々で日本軍は米  
軍の攻撃による「玉砕」  
をくりかえすことになっ  
た。

にするのです。とても丈夫なロープができました。

ヒマという作物もつくりました。飛行機も航空燃料が不足して、代用燃料としてヒマシ油  
という油を使っていたのですが、このヒマの種からヒマシ油をつくったのでした。

小学校では、私たち生徒が当番で、うさぎも飼っていました。うさぎの毛皮を、戦地の兵  
隊さんたちが着る防寒服に使うためでした。

兵隊さんが入隊する時には、校庭に皆で集まってお見送りをしました。今でいうと旧道と  
新道の交差している坂の頂上あたりまでお見送りをしました。道中は軍歌を歌いながらお見  
送りをするのですが、こうして送り出した兵隊さんの中には、無事に生きて帰ってこられない  
方もいました。また、戦争が始まったころには戦地で亡くなった方のお葬式を、町で行いまし  
た。町葬といいました。当時は豊平町でしたから、豊平町でのお葬式でした。しかし戦争が  
ひどくなってきてからは、このようなこともなくなってしまうました。

アリューシャン列島のアッツ島では二千六百人の兵隊が  
玉砕をしました。玉砕というのは、勝てないことが分かっ  
ていても最後まで戦うということだそうです。その兵隊さ  
んの遺骨を、今でいう高校生以上の学生が、道庁から月  
寒の軍司令部まで白い布で包んで、胸に抱かれて帰って来  
たこともありました。その時には、私たち生徒もお出迎  
えをするのに参列しました。



狸小路のスズラン灯（昭和11年）

イメージ図

○ポツダム宣言

一九四五年七月、ドイツのベルリン郊外のポツダムで、アメリカ、イギリス、ソ連の三首脳が会谈し、日本に無条件降伏を勧告した。日本政府は、この宣言を受諾して無条件降伏した。

○御前会議 明治憲法下で、国家の重大な緊急事件について、天皇の出席のもとに、重臣・大臣などがもよおす会議。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

戦争では、鉄や銅が兵器にたくさん使われるので、こういうものが不足してきて、家庭にある鉄や銅を少しでも多く供出しました。狸小路には、スズラン灯という街路灯があったのですけれども、それも供出しました。それからお寺の鐘などもです。とにかく戦争に使える物はなんでも供出して、「お役に立つならば」と、戦争のためにみなでがまんをしていました。当時はがまんをすることについて色々標語があり、「欲しがりません、勝つまでは」という標語もありましたが、何事もがまんをして耐え忍んだ時代でした。

昭和二十年八月には戦局の悪化ははつきりしてきました。ポツダム宣言がだされましたが、日本が宣言を受け入れる前に、アメリカはB29を使って日本に原子爆弾を広島と長崎に投下しました。二十万とか三十万とかの人たちが犠牲になったのです。そこで、御前会議でポツダム宣言を受諾することになり、八月十五日の正午に、ラジオの玉音放送で、天皇陛下が自ら終戦の詔書を放送されて戦争が終わりました。

戦争は大変無残で悲惨なものです。弾が当たって亡くなった、肉がはがれ落ちたり血だらけになり苦しんだりするのだそうです。また、原子爆弾で被災された人たちが、今もなお後遺症に悩み苦しんでいることは、忘れることのできない現実なのです。そして、戦争をしかけた方も、しかけられた方も苦しくつらい思いをします。さらには家族も友だちもみなそれぞれ引き裂かれてしまいます。戦争は、本当に恐ろしいものだ、このことだけはしっかりお伝えしておきたいと思えます。

DATA

平成20年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年1月14日
- ・清田区民センター



畔原忠雄(あぜはら・ただお)さん

- ・昭和5年(1930年)生まれ
- ・札幌市清田区在住

一番大変だったのは食べ物がないこと